

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22330145

研究課題名(和文) 社会調査史の多層的な構築に関する総合研究

研究課題名(英文) Multi-layered Construction of the History of Social Research

研究代表者

佐藤 健二 (SATO, KENJI)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：50162425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は日本の社会学の調査史における従来の方法を再検討し、新たな方法論的枠組みを提出することにある。社会学史は伝統的に近代社会に対する理論を寄せ集めたものに過ぎず、フィールドワークや質問紙調査などを通じた経験的な観察がどんな社会認識を生みだしてきたかは無視されてきた。この研究は、ことばだけでなくモノや空間やメディアによって認識される社会を含む、新たな理論的・方法論的枠組みを提出する。さらに、新たなコンピュータ技術や映像メディアをデータの収集・整理のプロセスで使いこなす方法論的な枠組みをも展望する。こうした試みは、社会学の研究および教育に大きな貢献をなすであろう。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to re-evaluate the previous use of methods in sociological research in Japan, and to propose a new methodological framework. The traditional approach to sociological research in Japan often merely involved compiling a body of theoretical knowledge concerning modern society, whilst the role of actual empirical observation (for example through fieldwork and questionnaire surveys etc.) was usually neglected. This study proposes the application of a broader theoretical framework, which also includes current issues in sociological research (for example referencing concepts such as "materiality," "space," "media" etc.). Furthermore, it advocates the development of a practical methodological framework, for example using digitalization, statistics and visual aids in processing and representing data. These frameworks will contribute to both research and educational methods.

研究分野：社会学

キーワード：社会調査 歴史社会学 社会認識 方法論 アーカイブス

1. 研究開始当初の背景

今日の社会科学は、専攻分野や研究領域が専門化し、具体的な研究手法や問題設定が並列的に細分化しがちである。結果として、社会学という学問が基本において取り組んできた原点となる問題意識の実践性や調査研究の有効性が見えにくくなり、研究すること自体の社会的な意義に疑問を持たれるような事態すら生まれている。分野横断的で領域融合的な試みの必要性が唱えられているのも、また研究成果の社会的還元や大学等の社会貢献の論議も、この専門分化の弊害が意識されたがゆえである。

社会調査もまた、1960年代から70年代にかけての議論があまりに、それを世論調査の新しい「技術」として語ったために、社会学的想像力の本質にかかわるという局面が軽視されてきた。理論の発展の歴史、学説の整理として確立した「社会学史」の研究に比して、広義の調査研究 research として社会学を支えてきた方法意識や実践の蓄積については、それを積極的に発掘し主題化する試みも少なく、組織だった研究が世界的にもなされていない現状にある。

研究代表者はすでに『歴史社会学の作法』(2001)等の著作において、そのことを指摘し、『東京市社会局調査の研究 資料的基礎研究』(1992)など、学史の欠落を補う資料蓄積の実験的な試みも積み重ねてきた。知識を参照し累積していける共通基盤をつくりだすことは、方法をめぐる論議に確固たる基礎を与える第一歩だからである。

『社会調査論』(2009)の第1部における、方法の論理とプロセスの総合的な検討は、そうした問題意識に基づく準備作業のひとつであった。「社会調査史」は単なる技術の応用の歴史ではなく、社会認識を生産する様式のいわば発展史であり、その歴史社会学的な分析である。調査実践に作用している技術的、制度的、文化的なさまざまな制約を乗り越える「認識論的切断」と「再組織」なしに、今日のような個人化や私化にもとづく「個人情報」概念の拡大が、調査の困難として現われる時代における社会調査 social research の諸問題と向かい合い、新たな方法のパラダイムを生み出すことはできない。

新たな社会研究の方法意識を作り上げるためには、日本の「社会調査論」の理論枠組みの広い範囲にわたる再検討と、現実に行われてきた「社会調査」の実践の方法論的特質を浮かびあがらせる枠組みの構築が不可避である。社会調査の歴史的な展開の単なる記述ではなく、方法論という認識の枠組みに踏み込んだ形で、社会認識の発展を明らかにすることが、研究の中核とならざるをえないからである。立場が違う数多くの研究者たちの共同作業も、また研

究会活動を通じての推進も、それゆえに必要となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代における社会調査の多次元的な可能性を、研究史の蓄積に学びつつ、社会認識を生産する実践の作法にかかわる公共知として再構築することである。その論理と方法の探究は、じつは「社会とは何か」「社会的なるものをいかに対象化するか」など、社会学という学問の「原点」を再考することにもなる。

本研究の具体的な研究の課題は、(1)近代日本の多様で多面的な社会調査の歴史を、調査実践の経験的な事実の累積をもとに描きだす、(2)理論史としての学史とは異なる、方法史としての学史を構成する、(3)歴史的な調査資料(原調査票データその他)について、それぞれのデータの質に合わせた多次元的な利用の可能性を探究し、社会学の研究教育に活かす方法を模索することである。ここでいう「近代日本社会調査史」の構築は、いうならば日本における社会学の発展を総括し、これからの研究の可能性を、歴史的な厚みにおいて考える新しい「学術場」の設定である。

第1に、われわれは日本近代の社会調査史の概略をまとめ、歴史的事実を共有する。従来のように、いわゆる社会学者だけではなく、人類学者や農業経済学者あるいは社会政策学者が行ってきた社会的なるものの調査をできるかぎり視野に入れることは、方法論の検討に必要な拡大となる。個別分野の学史記述を素材にした「総合」について、すでに『民族学研究』17巻1号の座談会「特集・社会調査」の回顧や、川合隆男氏の研究など、地域、家族、労働等々の領域でいくつかの手がかりがある。これらの手がかりをまず総合してみる必要がある。

第2に、個別の調査結果だけでなく、研究の「方法」の意義を、歴史的な枠組みにおいて明らかにすることは、われわれの独創的な目標である。ブルデューの「社会学の社会学」という立場になぞらえていうならば、「社会調査の社会調査」といいうるであろう。国勢調査が始まる1920年前後から2000年代のフィールドワーク論にいたる、社会調査論のテキストブックや、雑誌や紀要類のなかで展開された調査論がいかなる枠組みのもとで歴史を見通そうとしているのか。

第3に、本研究では日本近代の社会調査史の総合的な叙述を見すえつつも、個別に存在する歴史的な社会調査資料・データ(例えば過去の調査票や、集計データ、あるいは図表化された分析結果等々)を、どのように現在の社会学の研究教育に活かすかのケース・スタディも、視野に入れて研究を進めたい。個別の社会調査実践の成果

を参照できるデータベース作成の指針を明らかにすることも、研究期間内の目標の一つである。

3. 研究の方法

本研究は主たる目的である「社会調査史の構築」を達成するために、まず既存の日本社会学史からその素材を洗い出すとともに、調査報告や調査論の分析を進め、「社会的なるもの」の観察や分析がいかにデータ化されテキスト化されているかの共同研究を行う。そこで焦点となるのは、社会調査が「社会的なるもの」の認識、すなわち社会認識を生産してきた実践であるという位置づけであり、その実践を支えた「方法」を共有し批判的検討に付するためのアーカイブ化が、研究会活動の基礎でもありプロセスともなろう。

方法としては、以下の3つの有機的な連関のもとで進めていく。

(3-1)研究資料の収集および加工整理と分析。調査研究の報告書もしくは報告論文のテキスト収集は、「理論・学説史」としての学史から「調査史」あるいは「方法史」としての学史へと転換するために不可欠の共同作業である。これまでの検討は論文に現われた調査意図と調査結果と解釈に限られ、現実に使われた質問項目や調査票あるいはデータ記録用紙の形式や工夫の検討は、これまであまり共有されてこなかった。

今回の共同研究が、じっさいに調査研究において使われた技法にまで遡って発掘し、方法史的な検討に有効であるような形での資料の収集と整理とが必要だと考えたのも、そうした先行研究の弱点を補うためである。本研究では、ひとつの資料に問題を代表させてしまうのではなく、複数の資料体を考えあわせていくことで広い視野を開き、関係者へのヒアリング調査を含め研究グループとしての戦略的なパースペクティブを共有したいと考えている。

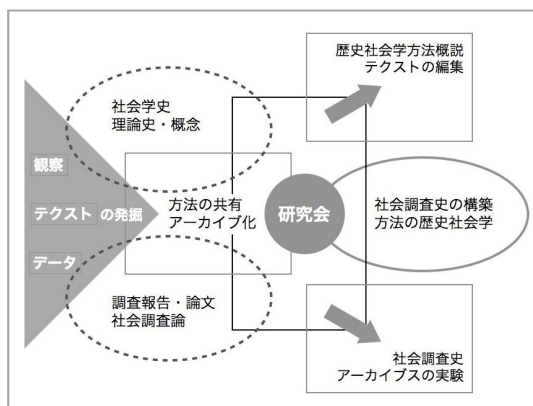
(3-2)理論史から調査史への分析的な再構成の基礎となる「方法」のアーカイブとしての共有の構築。文献目録という形式での集成は、本研究の問題意識からすれば限界が多すぎる。一定の長さの解題的な論文を中心に構成された島崎稔氏ら農村社会学の研究グループによる歴史的な労作である『戦後日本の農村調査』(1977)の形式も、個々の報告書の調査結果の論評に偏ってしまっている。日本の社会調査史を方法論の立場を重視しつつ、「方法」の工夫一覧する知識の土台としては、あまり妥当なものとはいえない。これまでの社会学研究方法論での一つの問題は、議論が具体的な調査資料や技術に基づいて行われず、ごく限られた形で二次分析が行われたような例を除いて、データや調査記録の具体性のレベルにまで遡った参照がほとんどなかった点にあ

る。いかなる形での共有が構築しうるかは、具体的な資料に基づくケース・スタディを積み重ねる必要がある。東京大学文学部社会学研究室に埋もれていた「社会調査室資料」や、戦後の代表的な社会調査の調査票原票などが、アーカイバル・データベースの素材となる。それらを事例として参照し比較しうるだけでなく、そこで引き出されている解釈を批判する根拠ともなりうるように、資料共有の方法を考えたい。

(3-3)問題の洗い出しや視点の整理から日本近代社会調査史の構築をめぐる研究会活動。いかなる成果発表のスタイルを選ぶのかも、研究会で討議すべき課題である。すでに述べているように本研究の目的は、理論構築とともに「社会学すること」を支えている調査実践の営みを、歴史的な厚みのもとで描きだすことを通じて、方法論的な想像力を活性化させる。いまだ社会学史としては書かれていない社会調査史の構築は、重要な媒介となろう。

可能であるならば、ここでの事実の発掘や方法の評価をもとに、歴史社会学の方法論を学ぶテキストの構想や、公開しうる社会調査史データベースの実験へと結びつけたいと思う。

こうした課題とその達成の方法とを簡略化して図示するとすれば、下記ようになる。



4. 研究成果

平成22年度の成果としては、第1の課題である近代日本の多様で多面的な「社会調査史」を調査実践の経験的な事実の累積をもとに描きだす作業は、それぞれの研究分担者の領域で進め、学会発表等々でその成果を公開した。とりわけ研究代表者がまとめた『社会調査史のリテラシー』は、今後の研究会活動の基盤の一つとなる成果であった。第2の「方法史としての学史」を構成する課題に関しては、具体的な研究実施計画に掲げた「社会調査室資料」(仮題)のリスト化および画像化の作業を踏まえて、データアーカイブとしての利用に向けた検討を始めた。第3の課題、すなわち歴史的な調査資料(原調査票データやモノグラフ

研究のなかで残された関連資料その他)について、それぞれのデータの質に合わせた多角的な利用の可能性を探究し、社会学の研究教育に活かす方法を模索するという点は、国勢調査関係資料の整理方針の検討や、都市コミュニティ調査の残存資料の予備的な検討にとどまった。しかしながら、経験研究をリードしてきた先駆者たちの理論や方法については、研究分担者の祐成保志や米村千代の研究が成果として公開されている。

平成 23 年度は研究会活動を海外にまで拡げることで、第 1 の課題である「社会調査史」の視野を深め、あわせて国際的な発信を模索した。具体的には調査地の中国・上海で、現地の研究者をまじえて研究会を行い、この歴史社会学的な研究の意義の共有に意欲的に取り組んだ。そこでの研究発表では、研究分担者の赤川学による、歴史のなかで忘れられてしまった人物(研究者)のライフ・ヒストリーや業績に迫るための文献の活用法や、研究代表者が昨年引き続きいてまとめた、ある民間学者の資料コレクションの分析方法など、多様な資料形態で残されている研究者の資料にどのようにアプローチすべきかが討議された。

第 2 の課題である方法史としての学史の構成は、その基礎となる理論史と方法史との架橋という作業を進めるなかで、研究分担者である野上元が本年度の研究成果としてまとめた『戦争社会学ブックガイド』とその作成にいたる一連の作業が、成果として注目される。文献資料の共有・集成のしかたとしても、また本プロジェクトが課題のひとつとして位置づけている、教育に活かせる「テキスト」「教科書」の模索という点からも、検討に値する事例を提供した。

第 3 課題である歴史的な研究資料の収集及び加工整理と分析については、本年度は国際的な視野をも加えて、日本が戦前に中国その他の海外において行ってきた社会調査についての予備的な研究を始めるなかで、社会調査史の充実を図るためには国内の蓄積に限らず検討していく重要性が明らかになった。また、関係資料を電子化しつつ、索引的な機能をいかに効率的に加えていくかについても、研究代表者が所蔵管理している文献群をケースとした試みを進めてきた。ファイル名の付け方など、いくつかの問題への課題と知恵とが生まれつつある。

平成 24 年度は、第 1 の課題の成果でもあった佐藤健二『社会調査史のリテラシー』(2011)を手がかりにしながら、戸籍、国勢調査、統計、都市研究、地域研究の複数のフィールドにおいて、「近代日本社会調査史」のさまざまな試みや源流の掘り起こしを進めた。公共性の構築という論点からの検討が加えられ、その意義が話し合われたことも研究成果の一つである。既存の「社会調査論」の体系的な再検討では、研究代

表者が『社会調査ハンドブック』の分析で試みた、構成や参照資料、また調査手法の分類、調査プロセスのイメージなどの分析を手がかりに、分析枠組みやその方針を検討した。「社会調査論」の論文の収集についてはかなり進め、社会調査協会が編集を進めている『社会調査事典』の事業にも協力しつつ研究を進めた。第 2 の課題および第 3 の課題について、東京大学文学部社会学研究所所蔵の「社会調査室資料」のリスト化および画像化に関して、基本的な整理共有と分析のプロジェクトを立ち上げた。同時に、この蓄積とも深く関連する「鋳物の町」関連のデータ整理と分析は、学部および大学院の学生の教育研究の実習という要素も入れながら作業を進めて、その一部をデータ化した。

平成 25 年度および 26 年度に関しては、このプロジェクトのまとめの年と位置づけてきた。

第 1 の課題である「近代日本社会調査史」の発掘と学史としての構築をめぐることは、日本の社会調査の実践に方法的にも人材育成の点でも大きな影響を与えた、柳田国男のいわゆる「民俗学」の周辺を集中的に洗い直して充実させた。佐藤健二『柳田国男の歴史社会学』(2015)には、その作業の成果が活かされている。

第 2 の課題である「社会調査室資料」(仮題)のデータアーカイブ化のプロジェクトに関しては、これまで進めてきた調査票データベースの入力基礎作業がほぼ終わったことを受けて、具体的な資料の活かしかたについて検討した。並行して行ってきた「鋳物の町」調査票の二次分析に関する方法論のマニュアル化については、技術的な理由から進行が遅れた側面もあるが、課題となるべきところは浮かび上がってきている。二次分析の作業のなかで浮かびあがってきた課題については、必ずしもすぐに解決できる問題ばかりではないので、このプロジェクトの達成を受けた後にも引き続き検討するためのスキームを明確にして継続的に取り組める準備を整えた。

この研究プロジェクトにおける既存の「社会調査論」の体系的な再検討という主題の主たる目的は、「社会調査史」の学史的な構築に資するという以上に、教育に活かせる「テキスト」「教科書」の模索およびそこにおける社会学的想像力の育成という意味合いが強い。この課題の一部については、研究代表者の『論文の書きかた』(2014)をひとつの成果として挙げるができる。既存の社会調査論の体系的な再検討の作業では、『社会調査事典』事業への協力を通じて、研究代表者は「社会調査とは何か」の大項目ほか「データ批判」などの複数項目において、これまでの論点を整理し、研究分担者もさまざまな項目で稿を寄せて協力した。とりわけ、いわゆる質的調査法に属

するさまざまな手法については、この研究プロジェクトの成果が活かされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 19 件)

- 1 祐成保志、住まいのとらえ方-社会学の視点4:居住空間の供給源、いい住まい・いいシニアライフ、査読無、125号、2015年、pp.21-26.
- 2 祐成保志、書評 武田尚子著『20世紀イギリスの都市労働者と生活:ロウンダーの貧困研究と調査の軌跡』、日本労働研究雑誌、57巻2・3号、査読無、2015年、pp.82-84.
- 3 Takeshi Deguchi, Beyond Shame and Guilt Culture to Globalised Solidarity: Reappraising Keiichi Sakuta's Sociology of Values as a Galapagosized Sociology, Theory, 査読無, Autumn/Winter, 2014, pp.19-24. http://www.academia.edu/10377291/Theorizing_Social_Constraint_Through_Venues
- 4 野上元、社会学の研究対象としての「戦争」その多様なアプローチ、社会学論叢、査読無、180号、2014年、pp.37-56.
- 5 加藤裕治・船戸修一・武田俊輔・祐成保志、NHK『明るい農村(村の記録)』制作過程と『農業・農村』へのまなざしの変容-番組制作者に対する聞き取り調査をもとに、マス・コミュニケーション研究、85、査読有、2014年、pp.165-183. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009833395>
- 6 武田俊輔・船戸修一・祐成保志・加藤裕治、戦後ラジオ・テレビ放送における『農村』表象の構築プロセス-媒介者としてのNHK農林水産通信員に注目して-、年報社会学論集、査読有、27号、2014年、pp.97-108.
- 7 Kenji Sato, Sociology of Culture in Transition, International Journal of Japanese Sociology, 査読有, Vol.22, 2013, pp.32-40. <http://doi.org/10.1111/ijjs.12007>
- 8 佐藤健二、渋沢敬三における「もうひとつの民間学」、歴史と民俗、査読無、30巻、2014年、pp.67-97.
- 9 赤川学、「造化機論」の千葉繁、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、査読無、26号、2013、pp.77-92.
- 10 祐成保志、ハウジングとホームの社会学、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、査読無、26号、2013、pp.19-25.
- 11 船戸修一・武田俊輔・祐成保志・矢野晋吾・市田知子・山泰幸、テレビのなかの農業・農村: NHK『明るい農村(村の記録)』を事例として、村落研究ジャーナル、査読無、19巻1号、2012、pp.37-47.
- 12 武田俊輔、滋賀県立大学学部生のワーク・ライフ・バランスと男女共同参画に関する意識、人間文化、査読無、30号、2012、pp.10-48.
- 13 中筋由紀子、親密圏とケアの論理、愛知教育大学研究報告、査読有、61輯、2012、pp.101-109. <http://hdl.handle.net/10424/4400>
- 14 祐成保志・平井太郎・西野淑美、戦後日本の社会調査における住宅の対象化、住総研研究論文集、査読有、38巻、2012、pp.303-315. <http://www.jusoken.or.jp/pdf/1024.pdf>
- 15 宮本直美、日本における音楽祭の変遷とオーセンティシティ、社会学評論、査読有、62巻3号、2011、pp.375-391. <http://doi.org/10.4057/jsr.62.375>
- 16 米村千代、家族社会学における家族史・社会史研究、家族社会学研究、査読有、23(2)、2011、pp.170-181. <http://doi.org/10.4234/jjoffamilysociology.23.170>.
- 17 祐成保志(訳)、ロバート・K・マートン「ハウジングの社会心理学」、人文科学論集 人間情報学科編、査読無、45号、2011、pp.135-164. <http://hdl.handle.net/10091/12803>
- 18 中筋由紀子、親密圏の始まり方/終わり方、愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)、査読無、60号、2011、pp.131-138. <http://hdl.handle.net/10424/3793>
- 19 野上元、『戦争体験』と近現代日本社会、日本学研究(檀國大學校日本研究所)、査読無、31輯、2010、pp.5-21.

〔学会発表〕(計 14 件)

- 1 Takeshi Deguchi, Beyond Shame and Guilt Culture to Globalised Solidarity: Reappraising Keiichi Sakuta's Sociology of Values as a Galapagosized Sociology, XVIII ISA World Conference of Sociology, 2014/7/14, Pacifico Yokohama. (神奈川県横浜市)
- 2 YONEMURA Chiyo, The Japanese Family in Transition, IJSS2014 (Indonesia-Japan Joint Scientific symposium 2014), 2014/10/29, Jogyakarta(Indonesia).
- 3 Yukiko Nakasuji et al., The changing consciousness and toward death and its traditions in contemporary Japan, What's Matter in Biopolitics of the Elderly, 2014/5/30, Seoul (Republic of Korea).
- 4 Naomi Miyamoto, Musicology in Post-War Japan: German Influence and Social Context, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014/7/17, Pacifico Yokohama. (神奈川県横浜市)
- 5 中筋由紀子、記憶すること/記録すること、日本社会学会、2012年11月3日、北海道

- 大学 (北海道札幌市)
- 6 Naomi Miyamoto, The Takarazuka Revue and Fans' Support in Theatre, 7th Conference of the European Research Network Sociology of the Arts, 2012/9/6, Vienna (Austria).
 - 7 祐成保志, ロバート・K・マートンのハウジング研究、日本社会学会、2012年11月3日、北海道大学 (北海道札幌市)
 - 8 赤川学, 『造化機論』の翻訳者・千葉繁とは誰か、歴史社会学フォーラム自由報告、2012/2/13、華東師範大学 (中国・上海)
 - 9 Akagawa Manabu, Can a Foucauldian analysis on sexualities be applied to non-Western societies? XVII ISA World Congress of Sociology, 2010/7/16, Univ. of Gothenberg, Gothenberg (Sweden).
 - 10 祐成保志, 戦後北海道における社会調査史の再構成とデータアーカイブの構築(2): 貧困調査と生活構造論、第83回日本社会学会大会、2010年11月7日、名古屋大学 (愛知県名古屋市)
 - 11 中筋由紀子, 記憶と親密圏、日本時間学会、2010年6月5日、山口大学 (山口県山口市)
 - 12 野上元, 戦争体験と近現代日本社会、檀国大学校日本研究所第26回学術シンポジウム<韓日大衆文化と戦争表象>、2010/4/23、檀国大学校石周善記念博物館 (韓国ソウル市)
 - 13 Miyamoto Naomi, Authenticity and Music Festivals in Japan, XVII ISA World Congress of Sociology, 2010/7/13, Univ. of Gothenberg, Gothenberg (Sweden).
 - 14 米村千代, 家族社会学における家族史・社会史研究、日本家族社会学会、2010年9月、成城大学 (東京都世田谷区)

〔図書〕(計 16件)

- 1 佐藤健二, せりか書房、柳田国男の歴史社会学: 続・読書空間の近代、2015、411
- 2 佐藤健二, 弘文堂、論文の書き方、2014、248
- 3 赤川学, 筑摩書房、明治の「性典」を作った男、2014、227
- 4 出口剛司, 東京大学出版会、越境する知と生の作法-フロムにおける『無意識』と知の生成をめぐる、熊野純彦・佐藤健二編『人文知3: 境界と交流』、2014、215(67-90)
- 5 祐成保志, 新曜社、訳者解説 ハウジングの社会学・小史、ジム・ケメニー著/祐成保志訳『ハウジングと福祉国家: 居住空間の社会的構築』、2014、322(271-296)
- 6 東由美子, 東京大学新図書館計画、東京大学文学部所属全教員全単著書目録、2014、630
- 7 米村千代, 弘文堂、「家」を読む、2014、210
- 8 Naomi Miyamoto, Routledge, The Takarazuka Revue: Its Star System and

- Fans' Support, in Made in Japan. Studies in Popular Music, ed. by Toru Mitsui, 2014, 254(23-36)
- 9 佐藤健二, 大修館書店、ケータイ化する日本語、2012年、293
 - 10 赤川学, 弘文堂、社会問題の社会学、2012年、137
 - 11 野上元・福間良明編、創元社、戦争社会学ブックガイド、2012年、309
 - 12 赤川学, 勁草書房、第7章構築主義を再構築する、米村千代・数土直紀編『社会学を問う』、2012、236(95-109)
 - 13 滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科 (武田俊輔) 財団法人長浜曳山文化協会、長浜曳山子ども歌舞伎および長浜曳山囃子民俗調査報告書 長浜曳山祭の芸能、2012、257
 - 14 米村千代・数土直紀編、勁草書房、社会学を問う、2012、236
 - 15 佐藤健二, 新曜社、社会調査史のリテラシー、2011、608
 - 16 宮本直美, 青弓社、宝塚ファンの社会学 - スターは劇場の外で作られる -、2011、194

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 佐藤 健二 (SATO, Kenji) 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授 研究者番号: 50162425
- (2) 研究分担者 赤川 学 (AKAGAWA, Manabu) 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授 研究者番号: 10273062
- (3) 研究分担者 出口 剛司 (DEGUCHI, Takeshi) 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授 研究者番号: 40340484
- (4) 研究分担者 祐成 保志 (SUKENARI, Yasushi) 東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授 研究者番号: 50382461
- (5) 研究分担者 東 由美子 (HIGASHI, Yumiko) 東京大学・大学院人文社会系研究科・特任助教 研究者番号: 00307985
- (6) 研究分担者 米村 千代 (YONEMURA, Chiyo) 千葉大学・文学部・教授 研究者番号: 90262063
- (7) 研究分担者 中筋由紀子 (NAKASUJI, Yukiko) 愛知教育大学・教育学部・准教授 研究者番号: 60303682
- (8) 研究分担者 野上 元 (NOGAMI, Gen) 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授 研究者番号: 50350187
- (9) 研究分担者 宮本 直美 (MIYAMOTO, Naomi) 立命館大学・文学部・教授 研究者番号: 40401161
- (10) 研究分担者 佐藤 雅浩 (SATO, Masahiro) 小樽商科大学・商学部・准教授 研究者番号: 50708328
- (11) 研究分担者 武田 俊輔 (TAKEDA, Shunsuke) 滋賀県立大学・人間文化学部・講師 研究者番号: 10398365